

ラケットを使って相手のコートにシャトルを打ち返す競技、バドミントン。オリンピック競技にもなっているスポーツです。

福島地区・仲町にお住まいの古川義直さん（31歳）は串間Jrバドミントンクラブで子どもたちを指導しています。もともと剣道少年だった古川さんがバドミントンと出会ったのは高校生のとき。その後、串間を離れ、一時、競技から遠ざかっていましたが、22歳のときに再開。5年前、帰郷を機に始めたバドミントン教室がきっかけとなり、現在のクラブを設立しました。現在、クラブには小学生9人と中学生2人が所属しています。

古川さんは指導者としての技能向上を目指し、現在、上級指導資格を受験中。また、県の大会でベスト8に入る実力の持ち主でもあります。現在も現役の選手として活躍しています。

「バドミントンをもっと串間に広めたい。そのことが自分の生きがいです」と話す古川さん。「バドミントンを知ってもらったために、子どもだけでなく大人のかたも、ぜひバドミントンに触れていただきたいですね」と熱意を語ってくれました。



毎週水曜日、みんなで元気に練習しています！



バドミントン仲間を現在募集中。
年齢を問わず連絡をお待ちしています。
古川義直さん ☎090-5297-6000

よしなお
古川 義直さん / (31歳)

[Mangifera indica]

ウルシ科マンゴー属の常緑大高木。インド、マレー諸島およびインドシナ半島が原産。宮崎県で栽培されているマンゴーのほとんどがアーウィン種。



としまつ
俊満さんが育てた



【マンゴー】

大東地区・仲別府でマンゴーを栽培する島田俊満さん（60歳）。マンゴー栽培を始めたのは、5年前に勤めていたJ Aを退職してからのこと。

俊満さんは11月からハウスの加温を始め、12月に花吊り作業とミツバチによる受粉、その後摘果や果実全体に鮮紅色を出すための反射板の取り付け、果実のネットかけなどの作業を経て、3月末から出荷開始。5月末まで出荷作業に追われます。「花吊りから出荷が終わるまでの半年間は、作業につきつきりで気が抜けない」と俊満さん。「ハウスの温度管理は自動だけど、機械はあくまで機械。最終的に自分で確認しないと安心できん」と、毎日自ら確認。少しの失敗で「1年分がパー」というわけにはいか



一口メモ
完熟マンゴー
「太陽のタマゴ」

果実にネットをかぶせ、完全に熟し自然にネット内に落ちたものを収穫する「完熟マンゴー」。その中でも、重量350g以上、糖度15度以上、鮮紅色部分が3分の2以上、傷がない、など特に外観が優れているものが、みやぎブランド「太陽のタマゴ」として認証されます。



ないので。
花を咲かせることにも気を使います。いい果実をつけるためには、充実した花を咲かせることが必要。「充実した花を咲かせるチャンスは1年に1回だけ」。1年の出来を左右する重要な作業なのです。

俊満さんのマンゴーは、完熟し自然にネット内に落ちたものを収穫する「完熟マンゴー」。この中から重量350g以上、糖度15度以上などの厳しい基準をクリアしたものが、みやぎブランド「太陽のタマゴ」に認証されます。「良い品質のマンゴーを作って『太陽のタマゴ』に認証される率を上げることが目標」と俊満さん。これからも高い目標を掲げマンゴー作りに取り組んでいきます。